

縁側の立話 O JUN + 松井智恵

O JUNと松井智恵が立話を始めている。ふたりが立っている場所は、建物の中でありながら、屋根も壁もない中庭に繋がる空間、ここはまるで内と外を曖昧に仕切る縁側と思われた。これを絵画の縁側と見立て、縁側におかれる絵画についての、ふたりの対話を発端とする絵画制作と、両者の作品がこの風変わりな小さな空間に並ぶという、その発表がこの展覧会の狙いとなった。

なぜこのふたりなのか？このスペースのオーナーである小笹さんから、ここでの展覧会を企画してみても、というお誘いをいただいたときに、すぐにふたりのことが思い浮かんだ。自身の発表だけでなく、同世代から学生までの幅広い層のアーティストをとりあげる展覧会の企画も手がけているOが、2013年に女性アーティスト3名の連続個展を企画し、その中に松井がいた(註1)。この時は企画者と選ばれたアーティストという出会いだっただけだが、このふたりの作品の出会いを見ることができたら、とわたしはその時からこの機会を待つことになった。Oが3名を括った共通項は「演劇的」だったが、松井の部しか見ることができなかったわたしは、Oと松井の「身体的」パフォーマンス＝絵画という接点から注意をそらすことができなかった。

Oが個展の折々に行う公開制作という過激なパフォーマンスは絵画作品にともなって周知されている。また2000年代になってインスタレーションに加え数多く制作してきた松井の映像作品も、過酷なまでに自らの身体を駆使したパフォーマンスが、その中軸となっている。身体の限度に挑むとも見える両者のパフォーマンスが見るものの緊張を誘う様態にはどこか接近しあうものがある。

○は視線を塞ぐ鉛の兜をかぶり、同じ重い素材の金属バットのような自家製筆記具を手に抱え壁に貼った紙に向かってドロイングする。絵を描くことは罪深くその刑を身に課しつつなお描き続けるかとも思える重大な決意が、荒い息遣いの中から生まれる震える線ににじみ出ている。○のそうしたパフォーマンスによるドロイングの息苦しさや絵画作品に見られる冷却の度合いにはかなりの開きがある。激しい行為を伴うドロイングからペタリと静止した画面までの距離は、絵を描く衝動を作品として冷ますに必要な隔たりであろうか。「わたしの胸暗さとわたしの描く絵の明るさが等量になるように、どちらかに目盛りを回し過ぎないようにとても慎重に」(註2)と○は書く。

いっぽう松井はといえば、古い建物の6階におよぶ階段を、足で登り降りするのではなく這い蹲ってにじり上り、そしてまた緩やかに転げるようににじり降りていく、あの初期の映像作品『HIMALAYA』は、いつまでも鮮烈な記憶を見たものに投げかけている。また幅狭な高みにある欄干を這って渡ったり、裸足で湾岸や、室内であっても広いひろい床の上を走り回ったりの激しい運動場面が頻繁にある『HEIDI』のシリーズも息を呑む際どい瞬間に満ちている。松井については、映像作品におけるパフォーマンス性と絵画の間の因縁は、それほど明らかではない。しかしわたしには初めて見た映像作品の衝撃がずっと続いていて、あの階段にへばりついてズルズルと登ったり下ったりする動きや、スリスリと床に接触する裸の足裏が、なぜかキャンバスに沿って絵具を置いていく筆や腕の動きと重なって見えるのである。初期のインスタレーションから、インスタレーションを併合した映像作品が続いたが、その間に絵画の発表もあり(註3)、2011年からは「一枚さん」と名付けたドロイングのシリーズをインターネットのSNSにて公開している。

両者のパフォーマンスは絵画に絡んでいる。ふたりの作品は、そういう外界＝イメージと躰＝記憶との密着性として見えてくる。身体の深部に潜んでいる絵を外に出すためにパフォーマンスがあるのだろうか。とすれば絵は躰と外界との縁側にあることになる。

昨年の下見の時に、クマダスク 1Fの空間に立ったふたりは、瞬間的に「油絵でいきましょう」と話しあった。それは外気に当たる場所なので紙はまずいから、という選択肢だったのであるが、ふたりの立話は絵具や筆の話にすぐさま突入していったように記憶している。その1年後、Oの国際芸術センター青森での個展(註4)に、松井とわたしもまた青森を訪れた。縁側立話の続きは山の際でも展開されることとなった。Oはオープニングトークの席で「紙の抵抗感、画材どうしの接触」について触れた。ふたりの立話の中で、筆がキャンバスにあたる瞬間の手触り、手応え、躰への反応という言葉が交わされる。絵と身体の抜き差しならぬ関係である。

こうした同じ場での立話は稀で、もっぱら縁側の立話は、展覧会に向けて交信されるメールであり郵便であり電話であって、その内容は二人の外は知るよしもなかった。その後、ミヅマ・ギャラリーの個展で公開されていたOの文章の中に、青森で会った松井のことが4-5行書かれてあった。

ひさしぶりに松井さんと話をする。絵の具がぬるぬるにちゃついで大変だと言う。今、後ろ向きの人物をねたねた描いていますと言う。是非見たい。絵の具の手触りとイメージの手触りの悲劇的乖離を同時に感触する作家。それを身も世もないような風情で喜劇のように話すこの人は本当に絵を描こうとしているなどあらためて思う。後ろ向きの人物を、私も描いてみようかとちらと思う。

このように対話を通じた制作に連れ、画材も共有され、この言葉どおり画題までも交換されたようだ。松井は後ろ向きの人物の頭部を描いた作品を、そしてOは座る姿勢を横向きに捉えた女性像を描きあげ、縁側に並べた。ふたりの立話は、絵と軀と空間の縁側にて弾みあい跳ね返しあい、いつもの場所よりもはるか遠くまで転がっていったことは想像に難くない。

(註1)「白井美穂・松井智恵・三田村光土里 - ロードショー」会期は3つの個展合わせて2013年10月1日(火) - 11月30日(土)、会場はvoid+(表参道、東京都港区)。

(註2) O JUN 「川に、入るまで」『O JUN 描く兎』株式会社青幻舎、2013年発行、p.124。

(註3) 松井智恵展「An Allegorical Vessels -HEIDI 47」、2007年 (MEM、東京)、「横浜トリエンナーレ2014」(横浜美術館、神奈川) ほか。

(註4)「O JUN 展 まんまんちゃん、あん」2016年4月16日(土)~7月3日(日)青森公立大学国際芸術センター青森

真武真喜子

(インディペンデント・キュレーター)